

ことばの迷い道

多言語の国 インドの教室にて

おかだ えみ
岡田 恵美

民博 人類基礎理論研究部

新型コロナウイルス感染症が拡大傾向にあった今春、「クラスター」「ソーシャルディスタンス」「ロックダウン」といったことばを日常的に耳にするようになった。当初は聞き慣れないカタカナ語の多用に対して、なぜ日本語を使用しないのかという意見も少なからずあったが、連日のニュース報道で瞬く間に浸透した。これは、世界規模の緊急事態に対し、外来語の訳語が間に合わずカタカナ語として定着した事例といえるが、こうした一連のことばをめぐる事象は、ふとわたしがインドに留学した当時を思い起こさせた。

北インドの音楽理論を学ぶために選んだ留学先は、首都ニューデリーの芸術学校であった。初日の出来事は今も鮮明に記憶に残っている。校長先生への挨拶後、弦楽器シタールの教室で待機していると、次々と学生たちがやってくる。「どこから来た?」「二人で来たのか?」「遠い国に来て怖くないのか?」「お父さんの職業は何か?」と、ヒンディー語での矢継ぎ早な質問責めにやや困惑していると、後にグルベン(師匠を同じくする姉弟子)となる女子学生が逐一英語に通訳して世話を焼いてくれる。クラスメイトは地方出身者も多く、それぞれの母語はヒンディー語のほか、パンジャーブ語、マイテリー語、ベンガル語、マラーティー語、ウルドゥー語など、多言語国家であるインドが象徴されている。そうこうしているうちに、師匠の登場である。教室の空気が一変して張りつめ、学生たちは順々に師匠の前に跪ぎ、師匠の足に手を触れ、頭を低く下げて敬意を示す。芸術学校であつても、グル・シシャ・パランパラとよばれる

る伝統的な師弟制度が根幹にあり、こうした挨拶は重要である。師匠は話し好きで、指導の合間も世間話から演奏会の裏話までと話題は豊富である。また不思議なことに、会話の最中であつても英語とヒンディー語を前触れもなく自然に切り替えるのである。これはインドでは頻繁に見られる光景で、一方がヒンディー語で話し、他方が英語で応答して会話が成立している場面もめずらしくない。また冒頭のカタカナ語のように、英単語もヒンディー語の日常会話に躊躇なく盛り込まれる。

留学初日で覚えているのは、「翌日の授業までにゼロックス・カロー(ゼロックスしなさい)」という師匠からのことばであった。授業後にグルベンに連れられ、学校裏の売店で手書きの譜面を複写した。要はゼロックスという社名・商品名が、コピー機で複写するという動詞として使用されているのである。同様の事例は数多く、例えば、インドにおける近年の教育熱の高まりのなかで、電子鍵盤楽器が若年層の習い事として浸透している事象を調査したとき、「ヤマハのカシオ」ということばを何度か耳にした。これはヤマハ製の電子キーボードという意味であり、カシオ製の小型鍵盤楽器が九〇年代以降にインドで爆発的な人気を博した結果、その社名が電子鍵盤楽器の総称として定着した例である。日本でも同様に社名のタッチキスが浸透した例などがあるが、グローバルな社会ではさまざまな外来語が次々と言語に組み込まれていく。そこにもローカルな独自の導入背景やあらたな意味の上書きが見られ、ことばは本当に生きものだと思ふのである。